

Graciela Mabel Russomando Alvarez 論文内容の要旨

主 論 文

TREATMENT OF CONGENITAL CHAGAS' DISEASE DIAGNOSED AND
FOLLOWED UP BY THE POLYMERASE CHAIN REACTION

(和訳) PCR 診断法を用いた先天性シャーガス病患者の治療予後判定

GRACIELA RUSSOMANDO, MARIA M. C. DE TOMASSONE, IVALENA DE GUILLEN, NIDIA
ACOSTA, NINFA VERA, MARIA ALMIRON, NORMA CANDIA,
MARIA F. CALCENA, AND ANTONIO FIGUEREDO

(掲載雑誌名 *Am. J. Trop. Med. Hyg.*, 59(3), 1998, pp. 487-491)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科新興感染症病態制御学系専攻
(主任指導教員：平山謙二教授)

緒 言

シャーガス病はサシガメによって媒介されるクルーズトリパノソーマ原虫感染症で広く中南米で流行している。昆虫による感染以外に慢性シャーガス病の母親からの経胎盤感染(先天性シャーガス病)は流行地域において現在でも大きな問題となっている。パラグアイは南米の中央部に位置し西にボリビア、北にブラジル、南にアルゼンチンに囲まれているが、北西部のチャコと呼ばれる乾燥地域は高度流行地となっている。

対象と方法

パラグアイの基幹病院 2 か所において、約 2000 人の妊産婦の血清検査を行い、約 10%がいわゆる慢性シャーガスと判定した。この妊産婦の出産した新生児について出生後数日以内に顕微鏡による原虫血症および PCR 診断を行い、3%の原虫血症と 10%の PCR 陽性者を検出した。すべての陽性者から生まれた出生児について一年の長期フォローアップを行い、ベンズニダゾールによる治療の予後、血清診断、PCR 診断の母子感染制御プログラムにおける有用性を検討した。

結 果

顕微鏡による原虫の検出は信頼性が高いが感度に問題があるが、出生直後の治療の適応判断に有用であることが明らかとなった。母体の抗体移行による血清診断の問題から 6-8 か月後の血清抗体の陽性転換が母子感染の次の有用な診断法となるが、今回の研究で、これらの陽性者は出生直後の PCR 診断においてすでに陽性と判定されていることが判明した。

考 察

遠隔地などで医療環境が整っていない地域においては顕微鏡による原虫検査、あるいは抗体検査の組み合わせによりある程度効率の良い早期治療が可能であることが示された。しかし PCR 診断法は出生初期から非常に感度良く母子感染児を検出することが可能であることも明らかとなった。種々の医療環境を考慮したうえでこれらの診断法を適切に組み合わせた制御法を考慮する必要があることを初めて報告した。